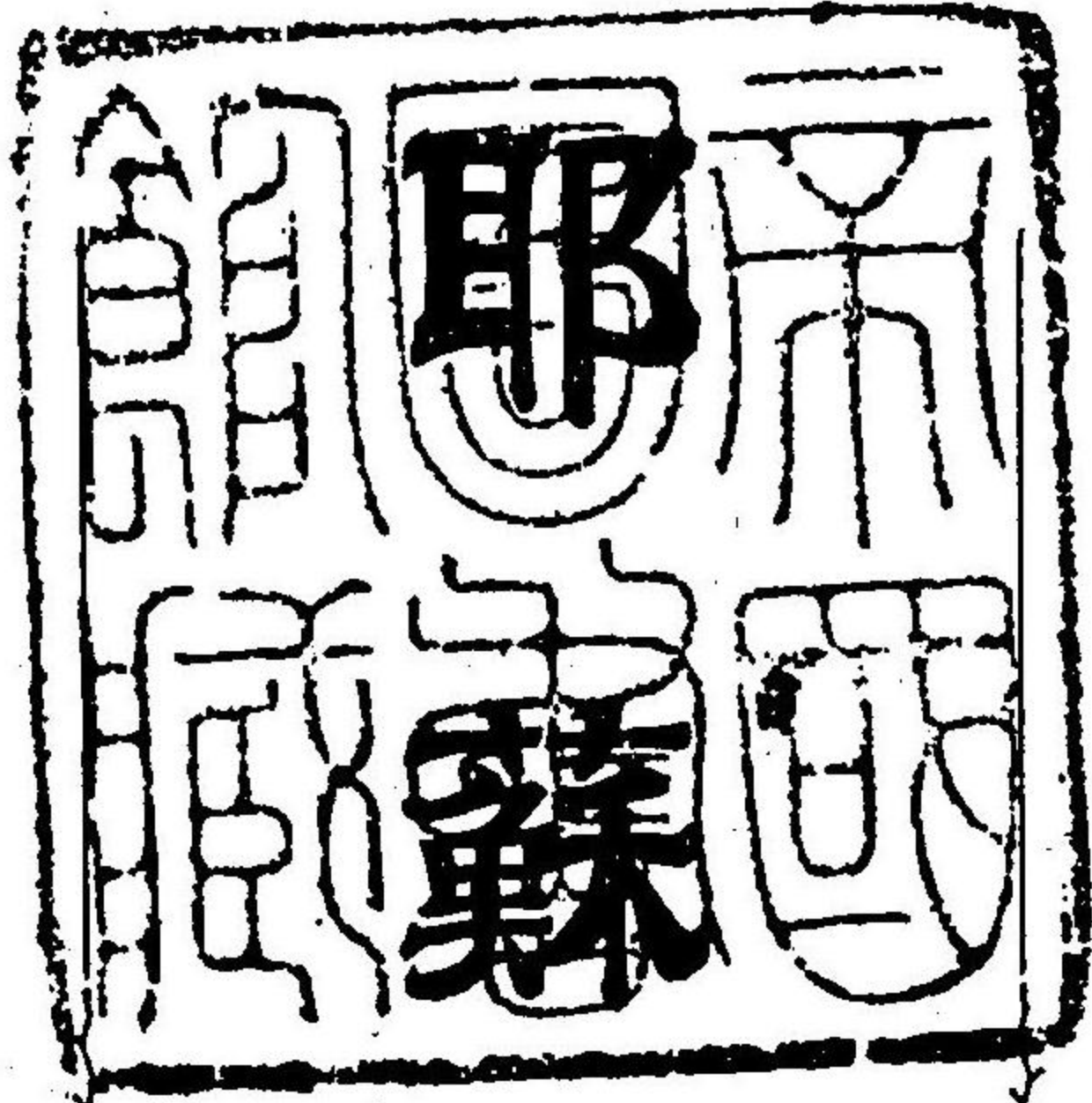


特51  
263

海老名彈正著



基督



明治三十三年十二月

福音舍發兌

## 序

余嘗學窓餘談て社の依囑を受け、學生青年の爲に基督小傳を綴り學窓餘談てふ雜誌に之れを掲載せしことありき、基督の傳記は青年も之れを讀みて興味を感ずべく、壯年も之れを讀みて元氣を振ふべく、老年も之れを讀みて深味を覺るべし。且又女子に至りては老若を問はず、限りなきの同情に感激するものあるべし。基督の傳記の如きは世界之れに比すべきもの一もあらざるなり。從て之れを綴ること、亦容易の業にあらざるを以て、我邦の如きは基督敎の傳布日未だ淺きが故に、此最も貴重なる傳記を多く有せざるなり。是を以て余が此小傳の如きも亦一讀の價值なきにあらざるべし。又此小傳は小は則ち小なりと雖も、曩に本邦人に紹介せ

られたる傳記の心付がざりし所亦甚だ少しとせず。我友人村松氏  
 爰に見る所あり、此小傳を一小冊子となし、廣く天下に公にせん  
 ことと企てらる。固より小冊子にして、余が期し望む所を去るこ  
 と遠しと雖も幸に初學の人を聊裨益するあらんを信し、爰に友人  
 の要求に應ずることを辭せざりしなり。若し夫れ此小冊を讀みて  
 基督を愛慕するの情を深からしむるものあらば、上天の余に賜は  
 る恩賞、蓋し之れより大なるものはあらざるなり。讀者幸に之れ  
 と諒せよ

明治三十三年十二月

著者識

海老名彈正著



世界三大陸の中央なる、パレスチンの地勢を察するに、北方は高く、ヘ  
 ルゼンの山嶽を仰ぎ、南方は低く、死海の深淵に臨み、東は荒茫として、亞  
 刺比亞沙漠の際涯なく、西には地中海洋々として、漲り渡り、パレスチン  
 は亦造化兩極の中心なるかな、ヨルダンの河、エフライムの山、南北に馳  
 騁として、パレスチンを縦斷す、ヘルモン山の麓、冷泉の涓々たるは、ヨル  
 ダン河の水源、其漸く平原に出るや、メロムの湖水に息ひ、復流れて、水清  
 く魚澤なるガリラヤ湖の美景を作り、ゲネサレの樂園を濕ほし、再流し  
 て曲折極りなく、終に荒廢暗澹たる死海の熱湯となりてやむ、エフライ

地勢

時勢

ム山脈もヘルモン山の分派にして、カルメル山の大脈を作り、西に大海の夕暮を眺め、東に琴湖の曉を望み、行々シオンの聖山を形作り、長驅して亞刺比亞の荒野に入る。基督在世の時このパレスチンは三部に分界せらる。則南部をユダヤといひ、中部をサマリヤといひ、北部をガリラヤといふ。是れ皆同じく羅馬の屬領なりしも、ガリラヤはヘロデ王之を領有し、サマリヤ及びユダヤは總督ピラト之を管轄す。

時勢

世界的大抱負を持し、宇宙に雄飛せんと前後時を同うして、史上に現はれ出たるは羅馬希臘猶太の三大國民なり。此三國は其始めや極めて小なりき。而かも其志望の大なる、古今を通じて其比を見ず。羅馬は政治法律を以て萬國統一の大事業を奏し、希臘は文學技藝を以て三大陸思想融化の大功蹟を遺し、猶太は宗教道德を以て萬民教化の大使命を帶

時勢

ふ、三國民各々其天才専門を皇張して、人類一家の同情を普及す。基督十字架に磔殺せられしとき、其罪狀の標札を希臘、羅、匈、希伯來の三國語を以て書せりといふ。是れ其當時の狀勢を能く表示したるものと謂ふべし。羅馬人は世界到る所軍人たり、官吏たり、故に羅匈語は官海の言語となる。希臘人は天下行く所遊ぶ所講師たり、師傳たり、故に希臘語は學海の言語となる。猶太人は東西南北舟車の通ずる所會堂を造築して、宇宙の神靈を崇拜す。故に舊約聖書は衆人の閱讀する所となる。然りと雖も羅馬の治世を謳歌し、帝國の萬歳を呼唱する者は専ら羅馬人にして、次に之に唱和する者は希臘人なり。獨り猶太人に至りては、慷慨悲憤、地を踏んで慟哭し、天を仰ぎて胸を敲けり。農夫鋏に倚て前代の王政を追慕し、商賈關稅の苛なるを怒りて、國家の獨立を慕ひ喘ぎ、工匠斧を揚げて、國家の爲に筋骨を鍛ふ。婦女子と雖も亦腕をさすり齒をかみ、仁人義士

誕生及家庭

を生み以て不俱戴天の羅馬人を攘ひ、國家獨立の光榮を見んことを熱望す。救世主生れて天地一新せんとの預言は、猶太國より流布して廣く天下の耳朶に達す。外干戈治まり四海波靜なりと雖も、猶太人の胸裡、煙鬱陶烈火、烟々此國民を領する者豈に一睡の安を貪るべけんや。

誕生及家庭

耶穌基督は羅馬帝國の噴火口、猶太民族の郷里、パレスチンに生る。工匠ヨセフの長子、其母をマリヤといふ、四弟二妹、ゲチサレ地方の山間僻陬なるナザレ村に家居す。父ヨセフは家貧かりしと雖も、聖書一冊、身賤かりしと雖も、刀一腰、工匠の業に勤勉して五男二女を養育し、以て一家團樂の福祉を受く。家族相歌ふて曰く

エホバを畏れ、其道を歩ゆむ者は皆福なり、そは其手の勤勞を食ふべければなり。爾は福を得、又安處に居るべし。爾の妻は家の奥に居りて

多くの實を結ぶ葡萄の樹の如く、爾の子らは爾の庭に團居して、彼等の若樹の如し

ヨセフ一妻七子を遺して先づ逝く。基督父の家業を襲ひ、母に孝、兄弟に友、以て家政に勤む、相和唱して謠ふて曰く

視よ兄弟相睦みて共に居るはいかに善く、いかに樂しきかな。首に注がれたる貴き油鬚に流れ、アロンの鬚に流れ、其衣の裾にまで流れ、滴るゝが如く、又ヘルモンの露降りてシオンの山に流るゝが如し、そはエホバ彼處に福祉を降し、窮なき生命をさへ與へ給へり

基督此の如くにして遂に三十に至る。

學問

基督幼少の時、村童と相携へ會堂に於て普通の讀み書きを學びたるも、其漸く長じて世界の偉人となりたるは、全く獨學自發の卓見なり。基督

督の天才は無比なりしも、亦之を誘ひ開きしものなくんばあるべからず、天然と聖書と社會とは即ち是れなり。  
 ナザレの山を攀ぢ登り、高平原に至りて縦に頭を廻らして四方を見れば、預言者エリヤが雨を祈り他神を排斥したる、カルメル山脈は美しく南天を横切り、西方山嶺を形作りて俄かに大海に入る。祖先アブラハム等が祈り祭れる、サマリヤの聖山は遙に東南の雲を衝き、ギルボアの峯ダボルの嶺は峨然として東天に聳ゆ、ギルボアの峯はサウル王と太子ヨナタンとが枕を並べて國家の爲に致命せる所、ダボルの嶺は女將軍デボラが土人の大軍を塵にせし所、此二峯の間よりヨルダンの溪谷を眺め、又遠く雲煙の間にペリヤ高原の髣髴たるを見る、一轉して眼を北方に放てば、即ちサフエドの美峯遡迤として漸くガリラヤ湖の一灣に出没す、基督山間に遊んで屢夜を徹す、山水の明美古跡の聯想、基督

がインスピレーションを受けたる學校なり。  
 ガリラヤの天地は三月四月の比こそ最も楽しけれ、千鳥妍を競ひ萬花英を争ふの時なり、歌人詠じて曰く  
 我友よ我が美はしき者よ、起ちて出で來れ、視よ冬すでに過ぎ、雨もやみて早や去りぬ、諸の花は地にあらはれ、鳥の轉る時すでに至り、班鳩の聲我等の間に聞ゆ、無花果樹は其青き葉を赤らめ、葡萄の樹は花咲きて其馨はしき香氣を放つ  
 棕櫚のたけ柏香のすがた、石榴の頰林檎の氣息、薔薇の顔百合花の唇、巴旦杏の肌膚葡萄の乳房、態を盡し妍を極め、緩く立ち遠く見て人の來るを望む、又窈窕たる班鳩、翩々たる駒鳥、莊嚴の鶴、可憐の雲雀、恐懼する所もなく、猜疑する所もなく、又煩慮する所もなく、馴れしく人に近きて媚を呈するが如し、斯る花鳥の間に逍遙して天地の靈氣を呼吸する

基督をして、空の鳥野の百合花を嘆美せしめたるも亦宜ならずや。舊約聖書は猶太人の虎巻なり、歴史あり、詩歌あり、預言あり、歴史は天地の開闢、人類の起原より叙し始めて猶太の國史に移り信仰の父アブラハム、建國の大聖モーセの勳勞を叙し、仁君勇將ダビデの戰勝、賢哲明主ソロモンの榮華、一轉して國家の分裂、再轉して國民の俘囚、又其放赦歸國の經歷を載す、詩歌は國歌にして敬神愛國の至情を叙す、短きは一家團樂の生活より、長きは國家滅亡の悲曲を誦ふに至る、預言は時勢を論じ、當代を警醒し、百尺竿頭一步を進めて將來の大希望を示す、この書を緝けば敬神愛國の至情湧然として禁すべからず、外國人と雖も猶然り、況んや猶太人をや、其熱血豈沸騰せざるを得んや。

基督は社交の人なり、父子の親、夫婦の情、兄弟の友、日常耕耘賣買の事より、冠婚葬祭の風習に至るまで、千態萬狀、凡て比喻となり、教訓となり

基督の金口より送り來るものは猶其時代のパノラマを見るが如し、ガリラヤ地方は南部ユダヤの如く保守頑迷者の跋扈する所にあらず、内地雜居し、少しく世界の面影を呈す。アラビヤ人來り、シリヤ人住み、ギリシヤ人賣買し、羅馬人横行す、然れどもガリラヤ人が愛國の至情鬱勃抑へがたきは却て南方ユダヤ人よりも熾なりき、是れ基督の腦裡に深く映せし所なり、嗚呼羅馬の鷲鳥中天に鳴號して、群鳥叢林に畏縮す、獨り猶太のキングホルドのみは勇奮してこの鷲鳥に仇せんと決意す、基督亦如何の方針をか取るべき。

メシヤ運動(猶太王政復古運動)

メシヤ王政の理想は猶太人の腦裡に深く印する所なり、パリサイ宗は戒律を守りて王政の天より降下するを待ち、ガリラヤの正義黨は干戈に訴へて王政の復古を謀らんと欲し、各宗各黨競ふて王政の復古を

メシヤ運動

翹望する其時に、霹靂一聲猶太の荒野より響きて、全國を震動せしめたるものあり。其名を洗禮ヨハ子といふ。彼れヨルダン河の下流に來りて絶叫し、王政復古を説き、時期の方に到れるを論ず。其髪は長く垂れて腰に至り、身瘦せ骨出で、眼光炯々たり、口に蝗蟲と野蜜とを食し、身に駱駝の毛衣を纏ふ。其王政主義はパリサイ宗の如く戒律主義にあらす。又猶太黨の如く干戈主義にあらす。乃ち純然たる道義主義なり。ヨハ子宣傳して曰く

天國は近けり、悔改めよ。

天國の臣民たらんと欲する者は、罪惡を悔改して衷心義人たらさるべからず。是時ヨハ子の王政論に感激し、悔改して洗禮を受け、彼れの王政運動に加入する者勝て數ふべからず。基督嘗てパリサイ宗と主義を同うせず。又猶太黨の干戈主義にも同意せず。獨り一見誠を懷きてナザ

レの僻村に潜み居たりしが、時なるかな、ヨハ子の王政運動に同感を表し、自から往きてヨハ子より洗禮を受く。

福音宣傳

基督ヨルダン河に於て、ヨハ子より受洗せるとき、豁然として自覺せるものあり。乃ちヨハ子が主張する王政の王たるは、我れ基督なりと自覺せり。因て直に荒野に入り、沈思黙考して、王政の性質を識認す。其王政は戒律を以て建つべきにあらす。干戈に訴へて廣むべきにあらす。人々各自の心裡に存すべくして、猶太人の想像せるものは、天地懸隔するものあるを見出せり。故に輕々しく發せず。靜にヨハ子の運動に注目し居たりしが、其運動日に月に熾なるに従ひ、ヨハ子自からヨルダン河を溯りて、ヘロデ王の領地に踐み入る。ヘロデ王ヨハ子が正義の聲を厭ひ、人民の狂動するを恐れ、彼れを捕縛して、マケロス城の牢獄に投せり。是



福音宣傳

に於て乎、基督運命の己れが頭上に轉遷し來れるを認め、一は以てヨハ  
 ナの志を繼ぎ、義人の聲の抑壓すべからざるを示し、一は以て自己獨特  
 の天地を開かんと欲し、ガリラヤ湖邊に歸りて天國の福音を宣傳す曰  
 く  
 心の貧き者は福あり、天國は即ち其人のものなればなり、哀む者は福  
 なり、其人は安慰を得べければなり、柔和なる者は福あり、其人は地を  
 つぐことを得べければなり、飢餓渴く如く義を慕ふ者は福なり、其人  
 は飽くことを得べければなり、矜恤ある者は福なり、其人は矜恤を得  
 べければなり、心の清き者は福なり、其人は神を見ることを得べけれ  
 ばなり、和平を求る者は福なり、其人は神の子と稱へらるべければな  
 り、義しきことの爲に責めらるる者は福なり、天國は即ち其人のもの  
 なればなり。

福音主義宗教道德

基督天地の創造者萬物の主宰、永遠の神を指し、衆人に諭して曰く、是  
 れ我が父、爾曹の父なり、衣食住の如きは一切之れを天父に一任して煩  
 悶する所なく、只日々勤勞して餘念なかるべしと、或は天空の鳥を指し  
 て曰く

天空の鳥を視よ

其稼くことなく、穡ることをせず、倉に蓄ふることを知らざるも、天父  
 は能く之れを養ひ保ち給ふことを諭し、或は野の百合花を指して曰く  
 野の百合花は如何にして育つかを思へ  
 其紡き務め織り縫ふことを知らざるも、其容姿の華麗なるは、古へ榮  
 華を極めたるソロモン王の王妃、女官の服装にも優ることを示し、天父  
 の恩寵殊遇を蒙れる人にして、豈に衣食の爲に窮死することあらんや。

然るを尙之れあらんは、人々其最も重んずべき神の國と其義とを求めずして、唯衣食にのみ營々汲々として萬物の靈長たる本分を盡さず神の國と衣食と其本末輕重を顛倒したるの致す所なることを明にせり。

爾曹先づ神の國と其義とを求めよ、然らば是等のもの(衣食住)は皆爾曹に加へらるべし。

基督人倫社交の大元理を一括して最も簡明に説き示して曰く、凡て人に爲られんと欲ふことは、爾亦人にも其如くせよ。

此元理は古人が律法に於て預言に於て萬般の人事に關して教示したるものを基督一括して社會永遠の憲法となし給へるが、其由て來る所の源流は父母の心を介して涓々たるなり。基督曰く、爾曹のうち誰れか其子パンを求めんに石を與へんや、又魚を求めん

に蛇を與へんや。

父母が其子女に對する至誠の一念は、此大元理の涓々たる滴水にして、其深く基く所は天父の胸底にあるなり。基督語を繼ぎ無窮の大源泉を教示して曰く、

爾曹惡しき者ながら善賜を其子に與ふるを知る、まして天に在す爾曹の父は、求むる者に善物をわたへざらんや、是故に凡て人に爲らんと欲ふことは、爾また人にも其如くせよ。

基督天父に事ふる道を示し、宗教の本義を明にし、孝子の至情を感發して曰く、

父よ願くは聖名をわがめさせ給へ、聖國を來らせ給へ、聖旨の天にな

る如く地にもなさせ給へ。又人々の理想として仰ぎ望むべき道徳の標準を明示して曰く、

基督の善行

天に在す爾曹の父の純全なるが如く、爾曹も純全なるべし。此純全なる天父に見習ひ、父母妻子兄弟は云ふも更なり、朋友といはず、親族といはず、同胞といはず、同宗といはず、仇敵をも愛するを以て神の子とは稱へらるゝなり。

基督の善行

時に老弱男女東西南北より群集し來る。基督會堂に入りては預言書を繙きて時期の到來せるを宣べ、山上に登りては葡萄を指し、荆棘を引きて天道の欺くべからざるを教へ、又舟を湖上に浮べては網をおろして人を漁る道を説き、其耳目に觸るゝ所のもの一として天國の譬喩とならざるはなし。或は俗人の宴に招かれては醫者の譬を設けて罪人の近づけ論すべきを説き、外國人の請に應じては其信仰の篤實なるを驚歎し、或は寂寞たる山嶺に登りては夜を徹して祈り、或は貧民の友とな

り、妓婦の情を察し、天下の人に俗物視せられ病者を醫し、狂者を憐み、湖邊を往來して救世の事業に熱中せり。

或る夜基督弟子と偕にガリラヤ湖を渡る。一天黒雲みだれ、颶風忽ち起りて波浪天を排す。基督船に枕して寝りぬ。舟殆んど沈没せんとしければ弟子等周章狼狽、腕疲れ目眩み、爲す所を知らず。遂に基督を呼び起して曰く、我等が溺るゝを顧みざる乎と。基督奮然として起ち、弟子輩を叱咤して曰く、何故にかく懼るゝ乎。爾曹何る信なき乎と。其威勢風波をも壓す。

基督の名望旭日の東天に昇るが如く、草木も之を仰ぎて百花爛熳たらんとするに至り、大衆群り來りて彼れを擁して王となさんと欲し、が基督之れを辭す。

基督と學者との衝突

基督と學者との衝突

基督己れの決意を弟子に示す

人民の基督に歸依する實に此の如しと雖もパリサイ宗の人々は力を極めて彼れに反對し、民間に立ち騒ぎて大に基督傳道の進行を沮害するに至る。蓋し基督は彼等が最も神聖として安息せる土曜日に於て病者を醫し、之を訟へんとせる人に問ふて曰く安息日には善をなすと惡をなすと生けるを助くると殺すと孰れか易きと、或は其弟子が麥の穂を摘むことを看過して、毫も責むる所なく之を咎むる者に告げて曰く安息日は人の爲に設けられたるものにして人は安息日の爲に設けられたる者にあらずと、或は社交外に厭ひ棄てられたる下等社會より、マタイを擢んで、其弟子となし、或は祖先傳來の習慣に従はずして其弟子をして食前に手を洗はしめざりし等、人道の爲に舊慣古例を打破したるもの甚だ多かりしを以てなり

基督己れの決意を弟子に示す

基督天父の恩愛を説き、人道の根柢を明にし、以て己れ自らが眞理の王、仁義の君たるを知らせんと試みたれども、民衆之を悟ること能はず、却て基督を推して世間の王たらしめんと欲す。學者輩亦覺ること能はず、基督を以て神殿を無みし律法を無みするものと誤解して極力彼れに反對せり。基督前途唯死あるを預知す。因て十二弟子を携へ世俗を離れて遠くヘルモン山の麓に到り、竊に弟子等の確信を尋ぬ。ペテロ答へて曰く

爾はキリスト活ける神の子なり(天國王政の王といふ義なり)

基督歡喜して曰く善かな、爾は福なり。爾が我れの王なるを認識したるは俗情の及ぶ能はざる所、必ず我天父の默示せる所なりと。是に於て乎、基督始めて其エルサレム城に登りて、大道王政の爲に致命者となるべきを告ぐ。弟子未だ之を然諾すること能はず。蓋し未だ王政の眞相を

基督己れの決意を弟子に示す

基督エルサレム城に登る

見ること能はざりしによる。基督ペテロ、ヤコブ、ヨハ子の三弟子を携へ  
ヘルモン山に登り、夜を徹して祈り、死生に關せず基督の信頼すべきを  
告ぐ。この時より基督衆人と弟子とに告げて曰く

若し我れに従はんと欲ふ者は己を棄て其十字架を負ひて我れに従  
へ、そは生命を全ふせんとする者は之を失ひ、我が爲め且福音の爲に  
生命をうしなふ者は之を得べければなり。もし人全世界を得るとも  
其生命を失はば、何の益あらんや。又人何を以て其生命に易へんや。

基督エルサレム城に登る

猶太の國祭逾越節近づきければガリラヤ地方の人々旅隊を作りて  
登城を企圖す。時に春深ふして將に夏ならんとす。ゲチサレの樂園紅緑  
相交はりて百鳥囀り、湖水魚肥はて葡萄香氣を放つ。基督人類の爲に其  
住み馴れしがリラヤの山水と花鳥と羊と鹿とに最後の離別を告げ、弟

子を伴ふてエルサレム城に登る。行々前途に十字架の死あるを語り、勇  
進奮行す。弟子其凜乎として侵すべからざるを見且愕き且懼る。

基督決死の覺悟ありと雖も弟子之を識る能はず。況んやガリラヤの  
群衆をや。弟子等は反て今回の登城を以て基督王位に即くの時ならん  
と思ひ、群衆亦此希望に熱中せり。

行々隨伴の民衆相加はり、パリサイ宗の人々基督の名聲を傷けんと  
欲し、當時の一大難問たる離婚問題を提げ來り、立法者モーセの威權を  
假りて離婚の許可すべきを以て耶穌を詰る。耶穌之れに答へて曰く  
爾曹の不人情なるに由てモーセ此律法を設く然れど開關の始神人  
を男女に造り玉へり。

基督一夫一婦の大倫を示して、パリサイ宗の人々を論破し給ひけれ  
ば、民衆彼れに歸依すること一入にして就中婦人の彼れに従ひ來るも

基督エルサレム城に登る

基督エルサレム城に登る

の多かりき。彼等其子女を携帶して耶蘇に祝福せられんことを請ふ。彼れ天國の人々は此の如き頑是なき孩提の子女なりといひて、之れを祝福せり。斯く人々の雲の如く集り、影の如く隨ふを見て、弟子等は其野心を熾にし、基督志を得給ふの曉は、誰れか其内閣の首座を占むべきかと相互に爭論す。耶蘇之れを知り、嬰兒を抱き、彼等を戒めて曰く

凡て我が名の爲に此の如き嬰兒を接る者は、即ち我れを接るなり。又我れを接る者は、即ち我れを接るにあらす。我れを遣はし、者を接るなり。

基督天父と自己と嬰兒とを一貫する所の靈氣を認め、之れを一視同敬すべきの道理を明にして、弟子の野心を打撃せしかども、彼等は尙覺ること能はざりしなり。其弟子中、錚々たる聞へあるヤコブ、ヨハ子の如きは、其母と基督の母と姉妹たるの故を以て、其母を介して、基督王位の

榮光を得給ふときに、此兄弟二人を其左右の大員たらしめ給はんことを歎願す。基督彼等が眞に生を輕じ、死を侵し、辛酸を嘗め、百難を排して、彼れに伴ひ得べき義勇あるやを問ふ。彼等の之を肯てするの確答を得て、其左右に坐するの光榮は、其親族たるの故を以て、又其特別なる厚意に由て與ふべきにあらす。唯天父の聖旨に由ることを示し給へり。又其十二弟子を召ひ集めて、天國の真相を開陳して曰く

異邦人の君と見ゆる者は、其民を治め、又大なる者共は、彼等の上に權を執る。然れど爾曹の中にては、然すべからず。爾曹の中、大ならんと欲ふ者は、爾曹に使はるべし。そは人の子の來るも、人を使ふ爲にあらす。反て人に使はれ、且多くの人に代りて、其命をあたへて、贖とならん爲めなり。

基督エルサレム城に登る

基督エルサレム城に登る

天國の主義は人を役せず、却て人に役せられ、人の主とならず、却て人の僕となりて、社會を裨益するにあれば、彼の基督の王位の赫々たるんことを熱望し、又其左右の大臣たらんと欲する野心の如きは、天國の主義を顛倒したるものにして、全く打破すべきなるも、弟子等基督の十字架の左右に磔殺せられたる盜賊を見るに至るまでは、此天國の眞義に悟入すること能はざりき。

基督エダヤのエリコ城に到れば、市民雲集して之を歡迎す、其路針を西方の山里に取り、驢馬に乗じて橄欖山に登りかゝるや、群衆前後に行列し、歡喜踴躍す、其橄欖山の絶頂に登りてケドロン河の彼方にエルサレム城の聳ゆるを觀るや、群衆狂喜して基督の萬歳を祝す、基督驢馬をといめて、暫時エルサレム城を望み無限の感慨に擊れて涕泣して曰く、もし爾だにも今この爾の日に於て爾の平安に關れることを知らば

福なるに、今爾の目に隠れたり、爾の敵爾の周圍に壘を築き、四方より圍み攻め、爾と其中なる兒女を撃ち滅ぼし、石を以て石の上に遺さる時來らん  
群衆は歡喜し、基督は涕泣す、群衆は基督の卽位を想ひ、基督は其の十字架を想ふ、群衆はエルサレム城の光榮を想ひ、基督は其滅亡を想ふ、靜に山を下りてケドロン河の川を渡り、都府に到れば、都民亦動搖す。

基督神殿に入る

基督神殿に昇りて視れば、賣買の聲喧しく、牛の咆哮、羊の悲鳴、兩替する者の射利眼、殿中恰も市場に異ならず、基督嚇然繩を以て鞭を造り、牛を逐ひ、羊を放ち、兩替する者の案を倒し、宣言して曰く、我父の家は祈禱の宮たるべきを、爾曹之を盜賊の巢窟となせりと、祭司長多數の祭司を伴ひ來りて、基督を詰て曰く、爾何の權威ありて是等の事をなすや、基督

基督神殿に入る

基督神殿に入る

答て曰く我れ亦爾に問はん爾之を答へなば我れ亦爾に答へんヨハチ  
 の洗禮は天命による乎將人意なる乎祭司等皆黙して答へず蓋し彼等  
 天命なりと答へんか何んぞヨハチを信せざるやといはれん己にヨハ  
 チを信せば基督の權威の天命に出るを承認せざるべからず若し又人  
 意なりとせんか民衆はヨハチを預言者とするが故に其反對を受くる  
 の恐れあればなり是に於て基督曰く我れも何の權を以て神殿を潔め  
 たるかを爾曹に告げじとこの後基督と祭司等との衝突愈猛烈基督當  
 時の宗教家を誣責して曰く禍なる哉爾曹偽善なる學者とパリサイの  
 人上爾曹は白く塗りたる墓の如し外部は美なれども内部は骸骨と腐  
 敗とに充つ爾曹は古への預言者を殺せし者の裔なることを自白す蛇  
 蝎の裔上爾曹如何で地獄の刑罰を免がるゝことを得んやと或は弟子  
 三人を携へて橄欖山に登りエルサレム城を眺めて其滅亡を語り或は

神殿に登りて學者と論争し又はベタニヤ村の一家庭に入りて最後の  
 近きを告げ終に其一弟子の裏切して祭司の術中に陥りたるを察す

基督の磔殺

基督其最後の切迫せるを親族朋友に語りしとも一人の之を信する  
 者なく覺るものなく尙基督が王位の左右を争へり基督エルサレム都  
 城の一樓を借り十二弟子と偕に逾越節を守る時方に十三夜の月の比  
 なり一人の弟子ユダ退席の後基督懇々後事を語り十一の弟子を携へ  
 ケドロン河を渡り橄欖山の麓なる月影暗き橄欖の園に入りて悲哀涕  
 泣す弟子其何の故たるを知る能はず基督三人の弟子を選びて尙園深  
 く入る然れ共一人の同情を表し能ふ者無し基督更に數十歩を進め獨  
 り天父に哀禱して曰く聖旨にまかせ給へ彼れ死期方に到れるを知り  
 斷然決意靜に捕吏の來るを待てり捕吏來て基督を縛す一人の弟子劔

基督の磔殺



基督の磔殺

を抜きて之を切る。基督曰く爾の劔を鞘に納めよ。凡そ劔を持つ者は劔にて亡ぶ。今や致命して上天に一任すべきの時なり。我れもし干戈に訴へんか。忽ち十二軍の義勇兵を召集すること容易なりと。彼れガリヤの青年壯士が如何に仇敵の血に渴し居るかを知る。弟子忽ち去り基督獨り縛せられて祭司長の家に到る。有司等愴惻裁判を開く。基督黙して答へず。是に於て乎。祭司長神明に誓はせて其神子たるや否を斷言せしむ。此時基督始めて口を開き、明白に其天國の王たるを斷言す。祭司長大に怒る。會衆之れに賛同し、滿場一致基督を死罪に決す。然れども當時猶太人は死刑宣告の權を失ふ。故に基督を總督ピラトに訟ふ。基督泰然自若。喜怒哀樂の上に超然たり。ピラト基督の無罪を宣告す。祭司等肯んせず。暴民を煽動し來てピラトに迫る。ピラト拒むこと能はず。遂に十字架に磔殺す。弟子茫然自失爲す所を知らず。

基督の復活

然りと雖も基督の堂々たる風采は、弟子の心裡に映じて實在するに異ならず。其神の感化力は弟子の人格を陶冶して基督の代理者たるに足らしむ。其無限の内容を有する教訓は弟子の記憶に存して長へに基督の原理たるを得。又其氣魄の凜烈たる、其靈氣の洋々たる、永へに弟子等を支配して衰へざるを以て基督磔殺せられたりと雖も、尙萬世を貫きて活く。時に基督年三十三。實に壯年の男兒たるなり。其福音を宣傳し始めたるは齡三十の時なれば、其世に在りて人類の爲に盡せるも、實に短日月なりき。之を八十の釋迦、七十の孔子、又七十のソクラチスに比すれば、基督は正しく少年にして其聖業遠く先人の上に秀づ。若し夫れ年少者にして古今に亞聖なり英邁なりといふ者あらば、吾人僅に指を歴山王と顔回とに屈するのみ。而して其道德識見固より基督の比

基督の復活

基督の復活

にあらす。基督神の獨子にあらすんば豈此の如くなることを得んや！



明治三十三年十二月十九日印刷  
明治三十三年十二月廿三日出版

編輯兼  
發行人

村松吉太郎  
神戸市山本通四丁目百二十二番邸

印刷人

辻岩雄  
神戸市三宮町一丁目三百二十番邸

發行所

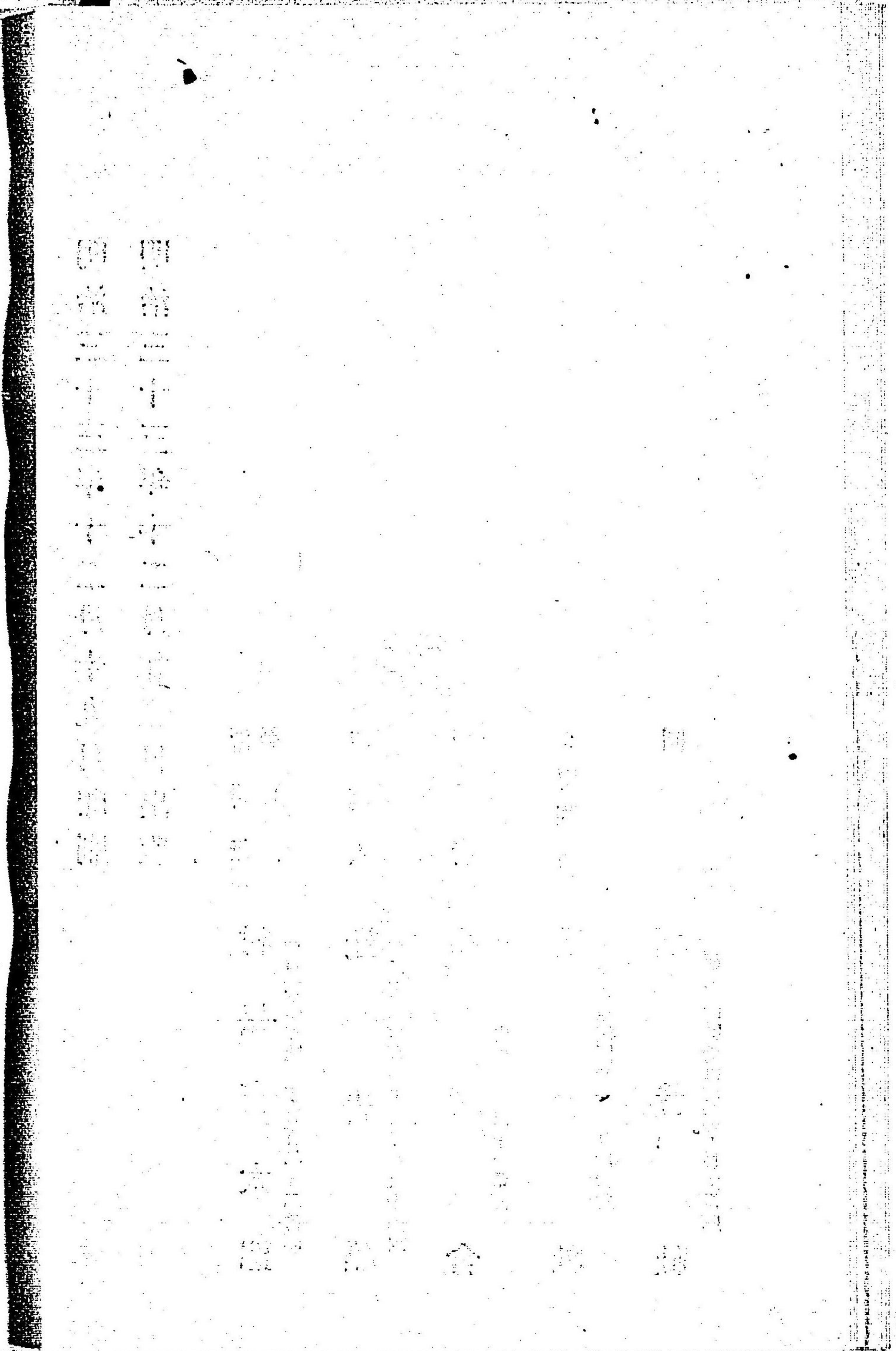
福音舎  
神戸市元町四丁目三十一番邸

大賣捌所

警醒社  
東京市京橋區采女町廿四番邸

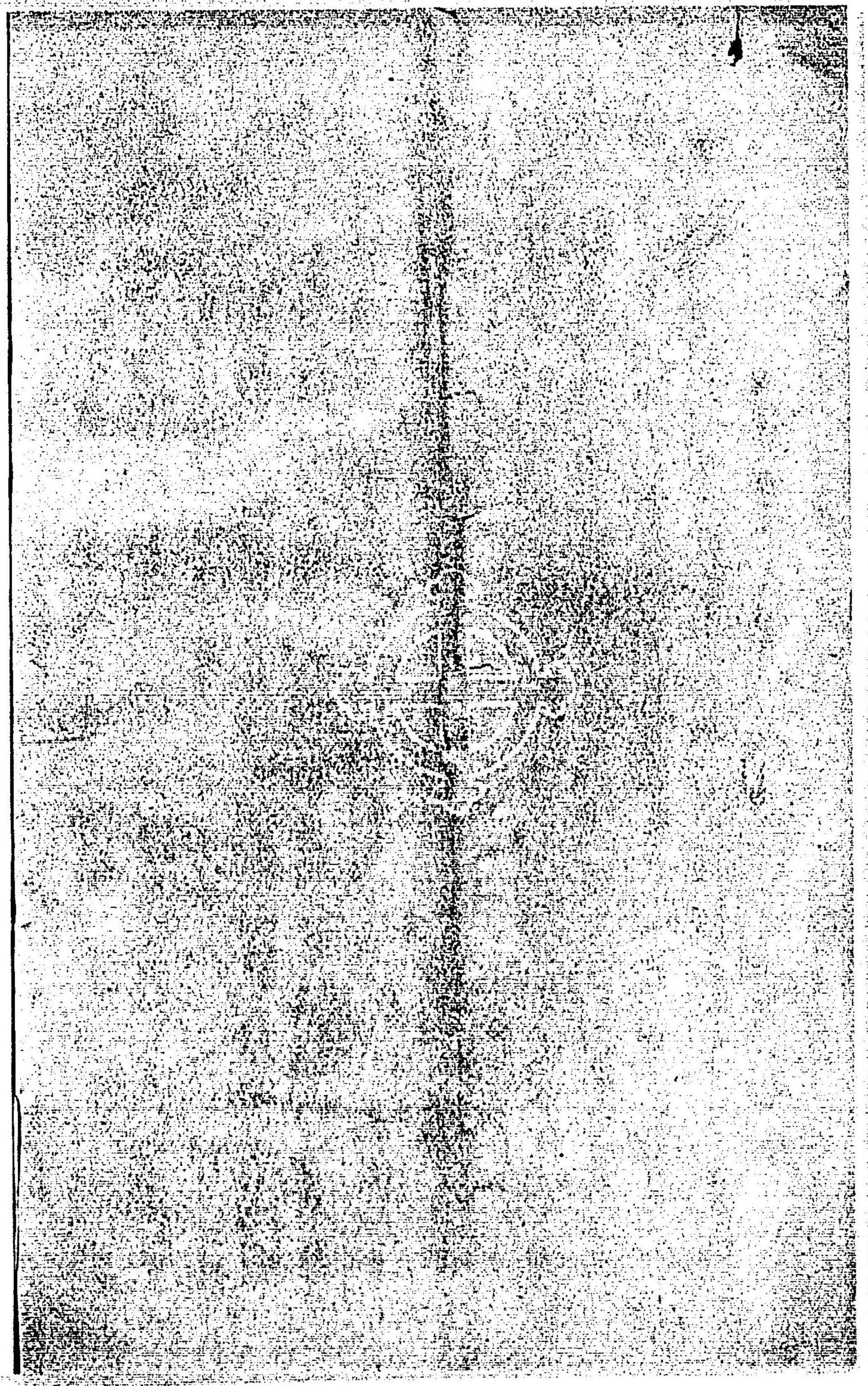
同

福音社  
大阪市西區新町通四丁目六番邸



四  
三  
二  
一  
十  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百



1944  
1945  
1946  
1947  
1948  
1949  
1950  
1951  
1952  
1953  
1954  
1955  
1956  
1957  
1958  
1959  
1960  
1961  
1962  
1963  
1964  
1965  
1966  
1967  
1968  
1969  
1970  
1971  
1972  
1973  
1974  
1975  
1976  
1977  
1978  
1979  
1980  
1981  
1982  
1983  
1984  
1985  
1986  
1987  
1988  
1989  
1990  
1991  
1992  
1993  
1994  
1995  
1996  
1997  
1998  
1999  
2000  
2001  
2002  
2003  
2004  
2005  
2006  
2007  
2008  
2009  
2010  
2011  
2012  
2013  
2014  
2015  
2016  
2017  
2018  
2019  
2020  
2021  
2022  
2023  
2024  
2025

特51

263

耶蘇基督

国立国会図書館

021364-000-6

特51-263

耶蘇基督

海老名 弾正/著

M33

ABI-1256



216  
194